

# 住みよいたけし

住みよ武石をつくる会広報

第29号

2022年2月16日発行

事務所 武石地域総合センター内  
TEL:0268-85-2511  
<https://www.s-takeshi.jp>  
印刷 中澤印刷株式会社



## 晴れの日には笑顔の花が!!

1月9日(日)上田市成人式が行われました。武石会場は2001年4月2日から2002年4月1日生まれの20歳、21世紀が始まった年に生まれた皆さん30名が対象です。

コロナの第6波が急速に拡大している折会場は本人だけの参列、時間短縮で行われ、例年の武石讃歌の斉唱もなく、恩師からのお祝いの言葉もビデオメッセージとなりました。スーツや晴れ着を着飾った新成人はそれぞれ一言ずつ現在の状況や抱負を発表しました。



駆け付けた小学校時代の恩師の祝いを屋外で聞く新成人

式の実行委員を務めた本庄乃葉さんは「春から病院事務への就職が決まっているので笑顔で患者さんに対応したい」と抱負を語っていました。

## 4月からの診療所は？

武石診療所の診療体制が大きく変わるということで、1月18日から21日にかけて住民説明会が3回設けられ、計約30名が参加しました。21日には4月から診療所長となる奥泉医師も訪れ、訪問診療など武石の在宅医療の継続に努力したいと挨拶がありました。



奥泉医師のあいさつ

市は、人口減にともなう受診者の減少や診療所の経営収支が悪化していること、医療従事者の負担減などを考慮して今後のあり方を考えてとしています。また現診療所長広瀬先生が3月で退職され、後任は現在東御市立みまき温泉診療所長の奥泉医師に替わるということで、平日の午前の診察

は、火曜と金曜を奥泉医師が、月曜は信州大学、水曜・木曜は依田窪病院からの応援になるということです。夜間や休日の在宅医療・看護の体制も見直し、カルテの統合や医師の派遣など依田窪病院との連携を強めていきたいとしています。

市の基本方針は

- 1 診療所はこれからも残していく。
- 2 医療従事者の負担減のため24時間365日で相談や往診に対応する「宅直」制度は来年（2023年4月）から廃止し、医者は依田窪病院と信大病院から応援を受ける。
- 3 電子カルテの統合など依田窪病院との連携を強め、3年後の統合再編を検討する。

といった内容になっています。

これに対し出席者からは、「診療所は今後とも残るといいのか。往診などの体制は取れるのか。武石の住民としても診療所を積極的に利用したりふるさと納税を活用するなど経営改善や存続のため協力するべきだ」といった質問・意見が出されていました。住民アンケートでも存続を求める声が圧倒的です。かかりつけ医として地域住民に親しみやすい診療所として存続してほしいというのが住民の大きな願いといえます。

## 風土つなぎ隊が「元気づくり大賞」を受賞

昨年12月23日、県の「地域発元気づくり支援金活用事業」の優良事例の表彰式が行われ、武石風土つなぎ隊（柳沢裕子隊長）が「元気づくり大賞」を受賞しました。この賞は、事業を実施した県下359団体のうち地方振興局ごとに1つずつ選ばれた10の知事賞の中から、会員の想い、実行力などが特に素晴らしいとされる団体に贈られたもので、県下の最優秀賞というべきものです。

受賞後の事例発表の中で柳沢さんは、

「合併後、人口減少など地域の活気がなくなっていく中で武石を何とかしたいと10人ほどの仲間が集まった。市のわがまち魅力アップ応援事業を活用しファッションショーや歌謡大賞などのイベント、恒例となった仮装大賞を実施するなど賑わいの創出をしてきた。さらに県の元気づくり支援金を活用し、2020年からは地域の交流の拠点として「つなぐ家」をオープンし、小物や駄菓子、地元野菜などの販売もしてきている。そうした活

動を通じて、地域の皆さんはもとより、長野大学学生など多くの人の協力を得、つながりをつくることできた」と発表しました。

風土つなぎ隊の定例会にも参加している長野大学学生の藤岡さんと小原さんは「いろいろな意見がどんどん出て、それを住民につなげていくことが素晴らしい」と話していました。



受賞後事例発表する風土つなぎ隊の皆さん

## 人口減少・少子高齢化・空家対策 ～地域課題にどう向き合っていくのか～

### つくる会部会が学習会

「空家が増えたね!」地域の中でそんな声を耳にする機会が多くなりました。人口減少と少子高齢化の波は武石地域に津波のように押し寄せています。地域から子どもの声がいつの間にか遠のき、若者は地域から離れて行く。老人世帯は、一人になると高齢者施設に入所するケースも多く、住んでいた家は空家になっていく。周辺に空家がある風景が日常のものとなってきています。

「自治会長もこれで4度目だよ!」。高齢化が進んで、限られた人の中でのやりくりで、地区によっては自治会組織を維持していくのも難しくなってきています。さらにコロナ禍で、住民同士のふれあいの機会も減り、地域の活力が失われ、これから先どうやって行くのだろう。そんな漠然とした不安を持っている人が増えています。

人口は減り続け、合併した2006年4月1日に4,173人あった武石地域の人口は、あつという間に4千人を割り込み、今年1月1日には3,259人まで減少しています。減少数は900人を超え、3千人の大台を切る日もすぐそこまできています。

住みよい武石をつくる会では、人口減少・少子高齢化・空家対策を地域課題の一つに掲げ、ふれあい交流部会と産業経済部会がこの課題に取り組んでいます。両部会では、次年度に向けて住民交流と移住促進にスポットを当てた調査研究を行なっていきたいと、移住交流推進・空家バンク対



策の学習会を1月18日に開催しました。学習会は、市の施策の実情を知るため、市移住交流推進課の職員を招いて、市で行なっている業務や空家バンクの概要、移住の実例、成功例等についてお話を伺いました。

最近はオンラインでの在宅勤務が増えたり、定年後に田舎暮らしをしたいと考える都市住民も増えてきています。2016年度に市が行なった空家調査では、武石地域の空家は162棟とのこと。空家は多いが、空家バンクに登録して賃貸、売買につながるケースがまだ少なく、需要があっても供給が少ないという現状があります。空家を貸したり手放したりできない理由は様々ですが、空家バンクに登録できる物件を増やすことができれば移住者の増加にもつなげていけるのではないかと説明を聴きながらそんな感想を持ちました。

地域の衰退になんとか歯止めを掛けたい。参加者からは、そんな願いや情熱を感じ取ることができた学習会でした。

### おねり行列 奴の配役決まる

子檀嶺神社御柱祭(4月10日)に奉納されるおねり行列の準備が進んでいます。1月17日には奴を決める会議が開かれ、配役が次のように決まりました(敬称略)。

- 振長刀 岩下銀平(中 島)
- 中長刀 品川晃輔(唐 沢)
- 金紋先箱 内田淳也(鳥 屋)・大沢拓真(堀之内)
- 御檜 松井慎哉(七 ケ)・児玉達弘(権 現)
- 赭熊 村岡 峻(藪 合)・松尾俊吾(下本入)
- 大鳥毛 宮原真統(七 ケ)・丸山隆史(小沢根)
- 台傘・立傘 下村 聡(沖 )・馬場光宏(堀之内)

2月1日から練習を開始する予定でしたが、コロナ禍でしばらく延期になってしまいました。振長刀の岩下銀平さんは「選ばれたからにはしっかり練習をして本番に備えて頑張りたい」と話していました。



振長刀に選ばれた  
岩下銀平さん

### 武石地区自治会連合会 新正副会長選出

1月7日に令和4年の武石地区自治会長会が開催され、次の方々が正副会長に決まりました。

武石地区自治会連合会  
会 長 雨宮 孝さん  
(藪合自治会長)  
副会長 松久宏明さん  
(沖自治会長)

# 武石地域の人口が減り続けています

## 地域づくりについて一緒に考えましょう

2006(平成18)年の4市町村合併、新市発足以来もうじき16年になろうとしています。この間に武石地域の人口は4,173人(2006年4月1日住民基本台帳人口)から3,301人(2021年同)まで872人減少しました(グラフ1)。

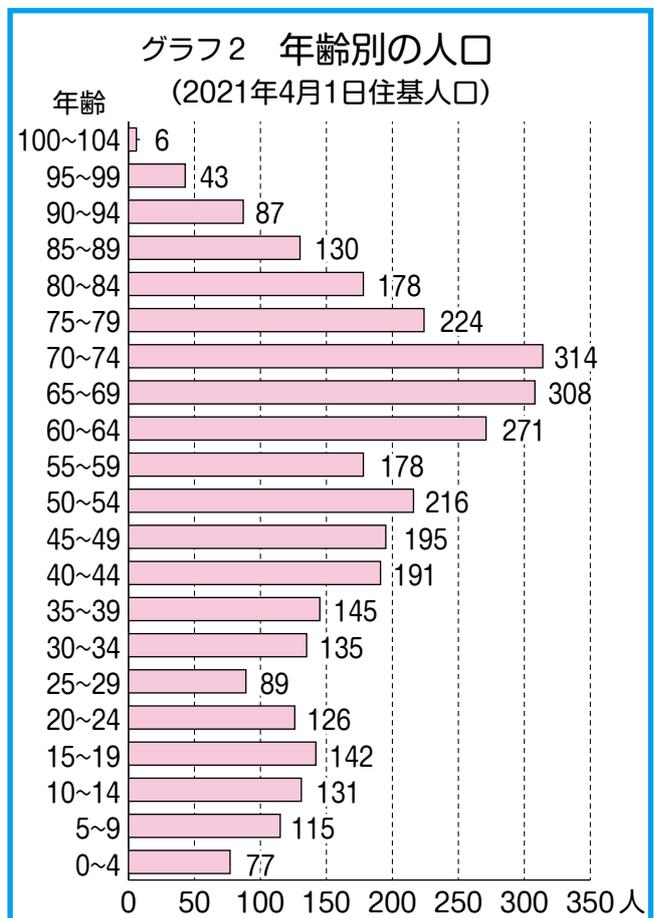
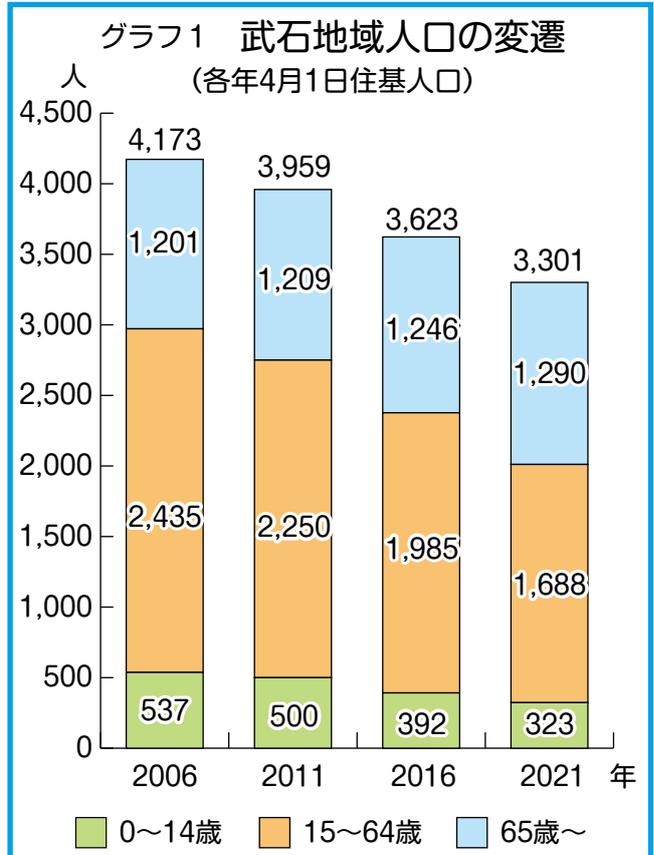
年代別構成をみると、グラフ2のように65歳～74歳世代が622人と地域の中で最も多くなり、高齢化率(65歳以上人口比率)は39.1%、要介護者が増える75歳以上の後期高齢化率は20.2%となっています。反対に生産年齢といわれる16歳から64歳及び15歳以下の人口は減り続けていて、0～4歳は77人(平均15人/年)と人口構成は逆ピラミッド形です。

大幅な人口減少は今後も続くものと予想されていますが、私たちは、とりあえず生活できているということで、人口減少を意外と実感していないかもしれません。しかし、人口減少はボディーブローのように徐々に地域にダメージを与え続けています。少子化・高齢化が進み、地域の活力が失われ、地域の課題もいろいろ出てきています。

住みよい武石をつくる会は、人口減の現状を踏まえたうえで武石地域の様々な課題を武石に住む自分たちが考え、行政や各種団体・活動する人たちと協働して解決していこうとして2017年3月に発足し、丸5年が経過しようとしています。しかしその活動は、今はコロナの影響もあり思うように進んでいかない状況です。

昨年3月に武石総合センターが完成し、本年は旧自治センター跡に市民の憩える広場がつくられることになっています。武石の中心部に行政の拠点、公民館、診療所、JA支所、郵便局、駐在所、小学校、児童館、デイサービスセンター、さらには美しい湯やマレットゴルフ場、ともしび博物館など人々の生活拠点と住民の憩える広場が集約されます。今こそ地域のコミュニティーづくりを改めて考える機会といえます。

地域の課題を明確にし、どうしたら住みよい地域づくりができるのかを一人一人が「自分事」として考え、地域コミュニティーづくりを進めていきましょう。



## 木曾義仲は、武石峠を越えて依田城へ

郷土史家 見玉卓文

腰越橋の高欄に騎馬姿の義仲像がはめ込まれていることを知っていますか。

平成5年に現在の橋が完成し、丸子町側の橋詰に説明板が建てられました。そこに腰越橋の変遷と高欄に義仲をデザインしたいわれが、「各地に残る伝承によると、義仲は国府のあった松本から武石峠を越え、腰越を通過して依田城に入ったのではないかと記されています。

義仲の武石峠越えは鳥屋地区に伝わった伝承が下地になっているように思われます。

明治政府の要請により、明治14年に当時の鳥屋村が提出した『鳥屋村誌』に、古跡「依田城址(鳥屋城)」が次のように書かれています。

寿永のころ、木曾義仲これを築く。その後興廃年号不詳(以上里老伝)。案ずるに養和元年九月、木曾義仲依田城に旗をあげ、上野・信濃の兵二千を集めて、横田川原へ出陣すと。かくの如き山嶺狭地に拠ること疑わし、当時すでに城地は多く平地なり、おそらくは天文・永禄の間、依田氏なるもの居城せしにあらざるか。中丸子村にまた依田城ありて、義仲旗をあげし所という。後考を待つ。

このことを調べ書いた方は村総代の内田甚松さんですが、伝承をきちんと記し、考察を加え、「後考を待つ」としたことは、他の「村誌」に見られない学問的姿勢といえます。

文中にある『中丸子村誌』は、「古城跡(里伝に依田城という)」として次のようにあります。

開戸にあり。源平盛衰記、平家物語に、養和元年九月、木曾義仲以仁王の令旨を奉じ、依田城に牙旗を揚げ、信濃・上野の諸将来属すとあり。(義仲古城と題した図があります)

依田城は、平家物語に次のように出てきます。

越後国の住人、城四郎長茂、木曾追討のためにとて、(略)(信濃国)横田河原に陣をとる。木曾は、依田城にありけるが、三千余騎で城を出でて馳せ向かう。(「横田河原合戦の事」)

寿永二年三月上旬、(略)鎌倉の前兵衛佐頼朝、木曾追討のためとて、その勢十万余騎で、信濃国へ発向す。木曾はその頃、依田城にありけるが、その勢三千余騎で、城を出でて、信濃と越後の境なる熊坂山に陣を取る。(「北国下向の事」)

『長瀬村誌』は、「源平盛衰記寿永中に、長瀬判官代義員(平家物語は重綱に作る)木曾義仲に属す(本村の人なり)。京師四条河原合戦に討死す、子孫不詳」と書いています。今日「義仲挙兵の地」と案内柱がある御嶽堂の『御嶽堂村誌』は、「依田氏城跡」と「依田氏居館址」の見出しはありますが、義仲のことは全く触れていません。

明治7年提出の『入山辺村誌』には、「寿永年中、木曾義仲兵をあげ、城資永と戦う節、桐原山道を越えて、依田城に拠り、(略)この時義仲、桐原黒の馬に乗るといふ」とあります。

これらの伝承を受けて大正11年、堀の内の小山真夫さんは『小県郡史』で次のように述べています。

依田川左岸流域に土着した清和源氏為実の子実信が御嶽堂の依田の城に拠った。「実信、はやくに義仲に応じ、その拠城を義仲に譲り、自ら居を高築地に移せり」と地元の伝承をあげ、「山辺村より武石村に入るを武石峠とす。この道は木曾より依田城へ往来する故に武石本道と言ひ、また一に城小路ともいふ、しかして所謂駒越より入る武石峠古道方面に始まり、この鳥帽子城(鳥屋城)に至るまで城砦点々として遺存せられ、要路に配置せられたる繋ぎの城の観あり、義仲が南信より北信に入れる道、若しくは此伝説当たるか」

腰越橋の説明文の根拠はこの辺りにあるようです。

依田窪地域だけでなく、北陸から京都にかけて義仲の伝説が数多く遺されているのは、彼の悲劇的な最後にもよりますが、短時日に成し遂げた業績が、華々しかったことにもよるのでしょう。

治承・寿永の戦乱は歴史の変換点でした。身びいきでなく、改めて義仲が「依田城」で兵を養った意味を、地域の皆で考えてもよいと思われま



武石を盛り上げる  
人やグループ紹介

# 武石の人 団体



武石おねり保存会  
会長 廣川 岩男さん



**御**柱祭は、現在子檀嶺神社のある小沢根と過去に神社があった余里・敷合(宮元)の人々によって永く行われてきました。しかし、昭和43年(1968)の御柱祭実施の年には、人手不足が原因で「おねり」もできなくなりました。今後どのように維持し保存していくか論議した結果、全村(武石村)で協力することになりました。昭和43年9月に「おねり保存会」を発足させ、同年11月の御柱祭では、初めて全村から人を集めたおねり行列の奉納が行われました。

また昭和46年には、このおねり行事を武石村無形文化財第一号に指定し、全村挙げて保存、継承してゆくことになりました(合併後も、上田市無形民俗文化財として指定されています)。

現在、「武石おねり保存会」(会長 廣川岩男さん)は、おねりの趣意に賛同し、後世に残すことを強く願う人を中心に師匠など16人で構成、おねり行列の企画・運営と伝統文化の保存・継承の活動を行っています。また、おねり行列に使用する衣装や道具などは、現在では入手困難な貴重な物もあり、クリーニングや虫干しなどを定期的に行って保存、管理をしているそうです。

今年の開催に向けて、地域内外に広く武石の御柱祭・おねり行列を知ってもらうために、武石地域総合センターに懸垂幕の設置、広告看板を地域内に2枚、上田駅前に1枚設置するとの事です。

おねり行列がいつ頃から始まったのか、定かではありませんが、天明2年(1782)とも伝えられています。文政(1818～1830年)の頃に、上田藩から農民の大名行列の模倣を差し止められた際、武石出身で江戸に武芸修行に出ていた小松典膳なる者が上田藩主の前で長刀振りの妙技を披露し、その褒賞に行列の復活が認められ、本物と区別するために道化

(おかめ、ひよっこ)を配することになったと言われています(武石村誌より)。

おねり行列には、約50の配役があり、各配役の人員、警護や目付役、師匠の皆さんなど総勢300人を超える大規模なものとなります。

廣川さんから、おねり行列の見所として次の三つを教えてくださいました。

- ① やっこ 奴の優雅で豪華絢爛の所作  
(先箱、槍、楯熊、大鳥毛、立傘、台傘、長刀)
- ② 小学校高学年の子ども達の小長刀振り  
(30数人による華やかな演武)
- ③ 中学生による笛、太鼓のお囃子  
(約40人の笛、太鼓が祭りを盛り上げます)

おねり行列が武石全体のお祭りになってから50年余、武石地域でも少子高齢化による人口減少、後継者不足など新たな課題も発生しています。

「おねり行列の文化を後世に残し、継承してゆく事は、おねり保存会の使命だと思っています。武石の最大行事として、地域を挙げてのおねりが、次世代へ向けて発展するよう願っています」、また「子ども達にこの文化の大切さを知ってもらい、後世につなげるとともに、地域の皆さんの縦横のつながりを深めて欲しい」と廣川さんは話していました。

「当日は是非行列を見に来て頂き、応援等で盛り上げていただきたい」との事です。

武石公民館(おねり保存会事務局)では、  
上田市ホームページ内に武石御柱おねり行列の  
専用ページを公開していますのでご覧ください。

武石御柱おねり行列 **検索**